

# 令和7年度 学力向上指導改善プラン

学校教育目標 夢に向かって共に歩むすずかけっ子の育成

目指す子どもの姿	笑顔はじけるすずかけっ子
変容を目指す資質・能力	a知識及び技能 b思考力、判断力、表現力等 c学びに向かう力、人間性等 d情報活用能力 e課題解決能力 f学び続ける姿勢 gコミュニケーション能力

三田市立すずかけ台小学校  
 学 校 長 荒 井 隆 一  
 研究主体【学力向上委員会（管理職と主幹教諭・研究推進担当・生徒指導担当を中心とする）を設置して実施する】

前年度		継続性	4月 ※全国学力・学習状況調査の結果などを受けて年度途中で変更する場合は削除、追記部分を赤字で修正		2～3月 年度末評価			
学力向上に向けた重点的な目標	年度末評価 (前年度の成果と次年度に向けた課題等)		学 力 向 上 に 向 け た 重 点 的 な 目 標 (変容を目指す資質・能力)	成 果 と なる 目 標 (指標となる数値等)	具 体 的 な 行 動 目 標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	教 員 評 価 (今年度の成果と来年度に向けた課題等)	評 価	
1.授業スタイルを確立する。 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・めあての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返りの学び方の流れを共通理解し、実践する。	○めあてやふり返りを意識した授業スタイルが定着している。 ○学校評価アンケート(児童)「自分の思いや考えを相手に伝えることができる」の項目において「よくできている・できている」の割合が全学年で増えた。ノートや発表、タブレットなど様々な手段を使うことができるようになってきていると考える。 ○研究の重点としてICT活用を位置づけることで、学習活動でのICTの効果的な活用について検討したり、ICTの活用方法を共有したりすることができた。	➡	1.授業スタイルの確立 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・めあての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返りの学び方の流れを共通理解し、実践する。(b・d・g)	・ふり返りの記述をもとに評価 ※めあてに沿った学びを具体的に書く。 ※自分の考えの変化を書く。 ※参考になった意見を書く。 ・多様なグループ、ペア・全体交流を授業に取り入れ、授業の活性化を図り、児童の学習意欲を高める。	・研究の方向性、年間計画、授業作り、ICTの活用方法などを確認する。(年度初めの研修研修) ・めあてや学び方の明示及びめあてを意識したふり返りを書かせる。 ・課題設定の工夫、効果的な言語活動を重視する。 ・一人学びで自分の考えを持ったうえでの交流をする。 ・ペアワーク、グルーワーク、全体交流を組み合わせた学びの分かち合いを授業に取り入れ、ふり返りで学びを見取る。	5	○めあて→ふり返り、一人学び→全体交流を意識した授業スタイルが定着している。 ○交流を通して自分の考えの広がりや深まりを叙述することがある程度できるようになっている。 ◆チャレンジタイムを活用することで一人学びの段階で、自分の考えを持つのが難しい児童への手立てを講じていきたい。また、効果的な手立ては共有し、指導の充実を図ってきたい。	A
2.思考力・判断力・表現力を育成する。 ○研究推進による主体的な学びづくり ・年間を見通した学習計画・指導案づくり ・一人一授業の実施 ・実践事例の交流 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導(タブレット活用も含む) ○考える力の育成 ・学習内容を日常生活とつなげる ・授業の終末の工夫	○年度初めに、年間指導計画の立て方研修を行い職員で共通理解を図った。また、研修で中学校の教科書の思考力について話を聞くなど、各教師が9年間の見直しを持って指導することの大切さを共通理解した。 ○研究の中心に「思考力育成」を位置づけ、思考力の可視化を意識した授業を実践することで、子どもたちの思考力が高まっていると考える。 ○学習単元の「思考・判断・表現」において前年度のポイントを上回っていた。適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする経験がさらに積み重なったと考えられる。 ○9月の思考力を提示するなど、思考力の育成に視点を置くことで、児童が「比較したい」「いいな」と、より意識を持って思考力を使っている場面が見られた。 ◆身に付けた思考力を活用し、自分の考えを表出する場の設定を今後さらに広げていきたい。	➡	2.思考力・判断力・表現力を育成する。 ○研究推進による主体的な学びづくり ・年間を見通した学習計画・指導案づくり ・実践事例の交流 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導(タブレット活用も含む) ○考える力の育成 ・学習内容を日常生活とつなげる ・授業の終末の工夫(b・c・d・g)	・共通の教材分析シートを活用した授業づくりを行い、思考力の育成を目指す。 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有できている。 ・ワークシートやノートに自らの考えや友達の考えなどを書き、学習の成果や価値を残すことができる。 ・図、表等具体的な資料を用いながら物事、数量の関係を捉え説明できている。 ・めあてに対してふり返りを書き、身についた学びを意識できている。 ・適切な思考力を使いこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする。 ・学力テストの考えや解き方を記述で説明する問題で、前年度のポイントを上回る。	・段階に応じたノートの書き方を指導する。(課題・式・図表・理由、ポイントの記入) ・自らの考え、思考過程、解法の理由・根拠の記入を指導する。 ・一人学び、図や表・ふり返りのかき方のモデルを提示する。 ・タブレットを使ったプレゼンテーション活動(高学年)を進める。 ・相互交流場面の工夫・充実)に視点をのいた指導案の作成する。 ・児童自らが見直しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくりを進める。 ・日頃の授業で、図や表を用いて数量関係を整理し、問題に取り組む習慣をつけていく。 また、具体をイメージしやすいように数字の意味を問うて、子どもたちが数字の意味を説明する機会を大切にす。また、「○○くらい」などの量感を意識できるように実体験を結びつく活動を大切にする。	5	○年間を通して、道徳科の研究において指導案だけでなく分析シートを作成しながら研究を行ってきた。その成果として、職員の大抵が分析シートの使用法を理解できたとともに子ども達の思考力の高まりを感じている。さらに、分析シートを用いることで、中心発問を精選したり、内容項目を意識したりしながら効果的な授業づくりに取り組めた。 ○校内研究会や同研究会での成果と課題をまとめ、全職員で周知することによって実践の積み重ねができた。 ○ノート指導、タブレット活用を含め、考える力を育成するために段階的な指導をすることで基本的な学び方が定着してきた。 ◆道徳科のふり返りや書き方や、交流の仕方についてはまだ系統立てた目標が作成できておらず、来年度の課題となる。 ◆自ら学びに向かったり、学び方を考え直したりする主体性が課題として残るので、来年度焦点化して指導していきたい。	A
3.ICT機器の活用による主体的な学びづくりをすすめる。 ○一人一授業の中での効果的な活用 ○実践事例の交流	○今年度も実践例を研究紀要にまとめ、教職員間で共有することができた。 ○学校評価アンケート「学習でタブレットを使うことができる」の項目で「よくできている・できている」97%の児童が答えている。子どもたちがタブレットを授業で活用することが定着してきたと考える。 ○学習単元の「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」の項目で、「役に立つと思う」が78%(全国平均+10ポイント)であった。児童がタブレットを効果的に使っていると実感している。 ◆「オクリンク」「ムープノート」等を使った効果的な交流学習のあり方を共有できた。今後は「オクリンクプラス」への移行に向けて事前研修や実践交流が必要である。	➡	3.ICT機器の活用による主体的な学びづくりをすすめる。 ○授業の中での効果的に活用する。 ○実践事例を交流する。(a・b・d)	・ICT機器を授業で活用し、実践交流会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有する。 ・児童のICT機器活用を日常化させる。 ・学年に応じたICT活用スキルを身に着ける。	・ICTを活用して児童の思考力を育てる実践事例を共有・活用(実践記録交流会)する。 ・「オクリンク」「ムープノート」「オクリンクプラス」等を使った効果的な交流学習のあり方を開発・共有する。	4	○毎日授業等でICT機器の活用を教員が意識したことで、児童のICT機器の活用が日常化してきている。 ○各学年に応じたアプリの使用、タイピングの練習等を通して、少しずつ児童がICT活用スキルを身につけてきているように感じる。 ○様々な教科でICT機器を活用することで、表現の幅が広がってきている。 ◆ICT機器を活用することで、資料作りのスキルは向上している。しかし、自分の発表に説得力を持たせたり、相手意識を持つまでには至っていない。 ◆授業でのICT機器の活用の実践交流があまりできなかったため、今後増やしていきたい。	B
4.自主学習と読書活動を推進する。 ○家庭での自主学習の習慣の定着 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員会と連携した推薦図書紹介活動の強化 ○電子図書館の利用	○タブレットを活用することで、自分の興味関心に合った様々な自主学習が展開されるようになった。 ○講師招きの情報モラル学習会、発達段階に応じた内容で3回(中学年対象・高学年対象・6年対象)実施した。家庭学習でタブレットを使用する際、子どもに対して学びポットで課題をこなしているが、保護者は関与できないため、保護者にも配慮していく必要がある。 ○学校司書・図書ボランティア、図書委員会と連携した読書活動の推進を行うことができた。 ○毎月の「家庭読書の日」を毎月全学年の月に読書タイムを入れることで、読書に慣れ親しむことができ、読書活動の活性化につながった。 ○読書100冊表彰、10000ページ表彰を学期毎に行い、読書への意欲づけができた。 ◆高学年になるにつれ、図書室離れ、本離れが進んでいる。本を読むのきっかけにしたり、コミュニケーションツールにしたりして、読書活動の活性化につなげていきたい。 ◆教科学習と読書活動の連携をより活発に進めていきたい。	➡	4.自主学習と読書活動を推進する。 ○家庭での自主学習の習慣を定着させる。 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員会と連携し、読書の機会を増やす。(c・e・f)	・児童が個に合った課題を設定し、家庭で主体的に自主学習に取り組む姿勢が定着している。(学校評価・児童による評価より) ・読書アンケート「読書が好きですか」の項目で肯定意見80%以上を目指す。 ・電子図書館活用人数、冊数を増やす。	・低・中・高学年用の「自学の進め方」を配布し、学年に応じて自主学習への主体的な姿勢の定着に取り組む。 ・学習内容を日常生活や未来につなげることで、もっと知りたいという気持ちを刺激する。 ・職員間で自主学習の研修を行う実践交流会を行う。 ・毎日、読書タイムを実施する。 ・毎月「家庭読書の日」は宿題を読書にし、家庭での読書時間を確保する。 ・本をコミュニケーションのツールとして使用する。	4	○毎朝の読書タイム、23日の「家庭読書の日」の設定により、子どもたちの読書をする意識は上がった。 ○学校司書・図書ボランティアさんとの連携により、毎月の図書館クイズ・読み聞かせが充実している。 ○自主学習の交流を通して、友達から影響を受け、発展的、探究的な学習に取り組めた。 ◆学年に応じた自主学習への主体的な姿勢の定着は課題が残った。 ◆職員間で自主学習の研修を行う実践交流会は行えなかった。 ◆家庭での読書の時間は確保できていないことが課題である。	B
5.個別指導の充実を図る。 ○朝学習・補充学習の充実と、つまずきが見られる児童への個別指導の推進 ○基礎的な内容について日常的な指導の工夫	○「がんばりタイム」を通して、基礎学力の定着、学習意欲の向上につなげられた。 ○個々の「困り感」に応じたアプリやプリントを活用することで、学習意欲の向上につなげることができた。 ○ドリルパークを活用し、算数科の新単元に入る前にレディネスチェックを行い、ドリル問題に取り組むことで、児童の実態把握が容易となり、つまずきに対して個に応じた支援をすることができた。 ◆子ども自身が自分の習熟度に応じて課題を選択できる学習設定や自らの課題を家庭学習につなげていく場設定を充実させる必要がある。 ◆「困り感」チェックシートを活用することで、児童一人一人の「困り感」を丁寧に見取ることができるようになっていく。	➡	5.個別指導の充実を図る。 ○朝学習・補充学習の充実と、つまずきが見られる児童への個別指導を推進する。 ○基礎的な内容について日常的な指導を工夫する。(a・b・d)	・計算や漢字の小テストを個の課題に応じて取り組み、計算力・漢字力が伸びている。 ・各教科学習で漢字・計算などの基礎的な力を使い、生かせるようにする。	・「がんばりタイム」による個別指導の充実を図る。 ・個々の課題に応じたプリントやタブレット学習の反復による漢字・計算の定着を図る。 ・ドリルパークを活用し、個々の課題に応じた計算や漢字学習を推進する。 ・復習項目(ポイントやキーワード)を使ったまとめ等、復習の仕方、復習ノートの作成の仕方を指導する。	4	○「がんばりタイム」をはじめとした個に応じて基礎学力をつけるための取り組みを実施できた。毎時間初めに計算検定を行ってきた。 ○グループ活動を取り入れ、子ども達が互いに学び合う環境を整えることで、個々の課題に対しての知識定着の推進ができた。 ○5、6年の学習に予習、復習を充実させたことで、授業のつまづきを減らすことができた。	B
6.学校園所の連携を通して学びの円滑な接続を目指す。	○学校園所連携では、全体会・分科会での意見交流を年3回実施した。また、授業見学を実施し、各学校園所の課題等を共有することができた。 ○けやき台中校区で学力向上部会を設け、学力テストの分析結果を交流し、中学校区の成果と課題を共有した。 ○中学校教科書から思考力に関わる単元を取り上げ、9年間を見通した取り組みにつなげることができた。 ◆幼小中の校種間で授業を参観し合う機会をさらに増やしていきたい。	➡	6.学校園所の連携を通して学びの円滑な接続を目指す。(a・e・f)	・中学校区共通の「目指す子ども像」の実現に向けたカリキュラムに沿って教育活動が進められている。 ・中学校の学習内容を踏まえ、9年間の学びを見通した実践を進めている。	・年間を通じた学校園所の継続的・計画的な交流を実施する。 ・けやき台中校区で「めざす子ども像」に向けたカリキュラムを作成する。	5	○学校園所連携では、全体会・分科会での意見交流を年3回実施した。また、授業見学を実施し、各学校園所の課題等を共有することができた。 ○けやき台中校区で学力向上部会を設け、学力テストの分析結果を交流し、中学校区の成果と課題を共有し、授業改善を行った。 ○6年生を対象として中学生が自分たちの学校生活や授業を紹介する出前授業を行った。中学校生活の見直しを持つことができた。	A
7.家庭や地域と連携し、学びを深める機会や学びの場を増やす。	○学校運営協議会委員の方々に授業を参観していただき、児童の笑顔に応じたアイデアを出してもらったことで、学習の場設定をひろげていくことができた。 ○学校支援ボランティアとの連携、読書・ミンなど支援をいただいた。また、「ありがとう集い」を開催し、全校児童がボランティアさんに感謝の気持ちを伝えることができた。	➡	7.家庭や地域と連携し、学びを深める機会や学びの場を増やす。(e・f)	・年2回の児童・保護者アンケートから、地域連携に関する項目の肯定的意見が80%以上を目指す。 ・地域支援ボランティアとの連携が計画的に進め、学校の中で地域の方が活躍し、児童の学びの充実を図る。	・学校運営協議会を母体とし、児童の興味に合わせた学びの場の提供を進める。 ・地域コーディネーターと校内地域連携担当を中心に、学校支援ボランティアと連携した授業を工夫、推進する。		○「教員評価」は教員対象に実施した自己点検調査結果(0～4の5段階評価)の平均値 ○「評価」は年間の取組みについて、4段階で評価 A・・・十分に達成 B・・・おおよ達成 C・・・達成が不十分 D・・・ほとんど達成できず	